

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	俳句 : 文苑
Author(s)	紫溟吟社; 龍翠; 翠琴; 子明; 悠童; 杜子; 祝子; 紫郎; 秋星; 一波; 越吳坊; 杭子; 禾乃; 万里; 木瓜作
Citation	龍南會雜誌, 108: 49-51
Issue date	1904-11-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5770
Right	

俳句

紫溟吟社

○秋晴

秋晴や櫓太鼓の鳴り渡る

龍翠

病居士の椽に爪切る秋日和

翠琴

秋晴や五湖に浮くなる船の數

子明

球磨川を下る其日や秋の晴

悠童

秋晴や運動會のときの聲

杜子

秋晴の足ひたし行く海邊あな

祝子

秋晴や淺間の煙遙あな

龍翠

風和ぐや七里が濱の秋日和

翠琴

秋晴の我には久し詩の病

杜子

煙吐く山近々と秋の晴

悠童

草山に馬飼はむ哉秋日和

翠琴

目に遠き阿蘇の煙や秋の晴

子明

○柿

柿日記俳句をつくる人となり

祝子

山柿の夕日に照るやきわやかに

龍翠

法會ある寺に柿賣る嫗かな

子明

柿取つて坊やに呉れる李右衛門

紫郎

柿落ちて轉さひしき庵あな

翠琴

梢高く残る熟柿や雨の夕

悠童

豆柿や草に埋るゝ車井戸

紫郎

雲崩れ柿の實に映ゆる夕日哉

祝子

澁柿の役にも立たぬ我身哉

祝子

赤くと柿黄昏ると渡るな

翠琴

○秋の蚊

秋の蚊の硯の水に溺れ覺

秋星

味噌小屋に折々秋の蚊のうなり

翠琴

秋の蚊の垣根に高きうなり哉

杜子

秋の蚊の毛脛にあひてためらひぬ秋星

子明

秋の蚊を打つに哀を思ひ覺

翠琴

溝古りて秋の蚊弱し草赤し

紫郎

秋の蚊や雨となる夜を歌にうむ

紫郎

○砧

風強く砧亂るゝ山の里

悠童

砧うつ夜や三更の月明り

翠琴

砧うつてさて笑みて若き妻

杜子

秋の灯に砧の響く山家哉

祝子

月小に其音も細る遠砧

秋星

風が吹く砧の音のしごろもごろ

翠琴

山深く小村小村のひる砧

悠童

隣から不意に打出す砧かな

紫郎

水村の灯遙かに砧うつ

子明

○花野

花の野や月夜十字の路あすみ

一波

山近く花野の末に日の暮るゝ

越吳坊

白き鳥の南へ飛びぬ花野哉

杭子

山暮れて花野に鐘のわたる哉

翠琴

十月や花野に多き詩の思

龍翠

○虫の聲

虫の聲下駄かへられて來る夜哉

越吳坊

古井戸や地虫なく音いと深し

禾乃

渡守る焚火は更けて虫の聲

翠琴

人を待つ橋の袂や虫の聲

全

町なかの石の置場や虫の聲

杭子

○石（秋季結）

秋日和漬石洗ふくさみ哉

越吳坊

水あかの黄いろき石や下り砧

杭子

○鶏頭

薄日さして傘干す庭や葉鶏頭

杭子

雨に立つ鶏頭つくねんど黄昏るゝ翠琴

○木屋

木屋やごぶ板通る星明り

杭子

薄暗き路次木屋の香り哉

万里

木屋や小庭に寂し秋の雨

龍翠

○柳散る

假名文字のゆかしき橋や柳散る

越吳坊

○野分

野分して昔はがれたり上り船
遠くふは提灯火事の野分哉

木瓜作
杭子

杭の間水のもめ合ふ野分哉
院は今比叡詣に野分かな
武藏野や野分の跡に二十日月

越吳坊
一波
翠琴

獨上高樓望八都
黑雲散盡月輪孤

茫茫宇宙人無數
幾個男子是丈夫

(呂洞賓)

